

天^{あま}の原^{はら}
(阿倍仲麻呂^{あべのなかまろ})

天^{あま}の原^{はら} ぶりさけ 見^みれば 春^{かすが}日^が なる

三^み笠^{かさ}の 山^{やま}に 出^いでし 月^{つき}かも

解説 日本から使節が唐の国に到着したので、仲麻呂は玄宗皇帝に帰国する許可を得て、日本の一行と旅立ち、明州^{めいしゅう}の海岸に着いたとき、その地の人々が送別会を開いてくれた。その時、夜になって月が感慨を深めるかのようにさしのぼったので、それを眺めて詠んだ歌。(故郷の春日にある三笠の山に出た月を思い出した詩)

語釈 ※天の原Ⅱ広々とした大空。※ぶりさけ見ればⅡ遙か遠くの空を仰ぐ意。※春日なるⅡ春日にあるの意。※三笠山Ⅱ奈良市の春日大社の後ろにある山。遣唐使の出発に際し春日山で神を拝す習慣があったという。

通釈 大空を遙かに見ると美しい月が出ている。あれは昔、故郷の春日にある三笠の山に出た、あの月と同じ月なのである。